「主体的・対話的で深い学び」の授業を振り返って

宮崎県立〇〇高等学校　国語科 〇〇　〇〇

１　授業実践のゴールイメージ

『桃花源記』の作者である陶淵明の他の作品や、生きた時代の背景を知ることで、作品に対する解釈が深まると同時に、他の資料によって視点が変わり読みが深まる実感を持つことができる。

２　公開授業の研究協議における先生方のご意見

〇作者の歩んだ人生やその時代背景が影響していることを知ることで、作品をより深く理解することができるようになるのではないか。(新たな視点を得ることで思考の変化が起こり、深まりが出たのではないか)

〇他教科・科目との横断的内容があった。

〇協同問題解決型で、生徒間での意見交換が活発であった。また、自分達で手に入れた知識から思考を深める実感が持てていた。

●サブ教材（詩）の吟味と精選が必要。

●準備と授業とのバランス。コストパフォーマンス。

●ゴールイメージの明確化。

３　「主体的・対話的で深い学び」の授業実践を行う上での気をつけたこと

「身につけさせたい力」（＝深い学び）を念頭に置き、そのための手段（＝主体的・対話的学び）において作業が主体となってしまわないように意識した。

また、我々教員も明確なゴールイメージを持つことは勿論、生徒自身も今やっていることが何につながるのかというゴールイメージを持たせることに気をつけた。

４　「教科の特質に応じた見方・考え方」を働かせた授業実践について考えたこと

国語は「言葉」による見方・考え方を働かせるとある。今回、授業を組み立てるにあたり新学習指導要領を読むなかで、深い学びの実現のため、他者との対話ではなく「書物（＝言葉)」から読み取りを通して主体的・対話的な学びを実践できないかと考えた。時間との兼ね合いもあり、書物からの読み取りを個人で行った上で、グループで精査させたが、その後まとめの時間で行ったレポートでは初読の感想とは違い、作品に込められた作者の思いをこちらが思っていた以上に多角的に考えられており、生徒の読みが変わったと感じた。「言葉」を何と捉えるか。対話、本、ネット、自分の中の知識･･･あらゆるものを使って、生徒の読みに揺さぶりをかけて行けるのではと考えると、実践が楽しく感じた。

また、ゴールイメージである「身につけさせたい力」とそのための手段を何度も自問自答するなかで、「単元」で考えることの重要性と共に、３年間を見通した「年間計画」の必要性を強く感じた。特に、同じ教科の先生方に授業計画を見て頂き議論を重ねるなかで、何の力を身につけさせるためにこの教材を使うのか、なぜこの教材でなければならないのかを考える機会が多かった。学習指導要領が変わる今だからこそ一から考え直し、国語だけでなく他教科とも連携を取りながらより生徒のためになる計画を組み直して行きたいと思う。